



Title	外国語でのコミュニケーションに対するビリーフが自己効力感の形成に与える影響：一人の日本人多言語学習者における事例研究
Author(s)	秋山, 美香; 山崎, 直樹
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2026, 22, p. 87-102
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/105097
rights	This article is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International License.
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《研究論文》

外国語でのコミュニケーションに対するビリーフが
自己効力感の形成に与える影響

―一人の日本人多言語学習者における事例研究―

秋山 美香（関西大学大学院 博士課程）

xiumei_01@yahoo.co.jp

山崎 直樹（関西大学）

ymzknk@kansai-u.ac.jp

**The Influence of Beliefs about Foreign Language Communication on the Formation
of Self-Efficacy:**

A Case Study of a Japanese Multilingual Learner

Mika AKIYAMA, Naoki YAMAZAKI

要 旨

本研究は一人の日本人多言語学習者（ミウさん）に対して半構造化インタビューを行い、1) 英語の使用による高度な社会的実践に成功したにもかかわらず、目標言語社会の一員としての実感が得られないのはなぜなのか、2) ローカル言語の使用によるより簡単な交流（例えばスターバックスでの注文）でも自己効力感を得られるのはなぜなのか、3) ミウさんが持つ外国語でのコミュニケーションに対するビリーフは、彼女の自己効力感の形成にどのように影響を与えるのかを分析する。オープンコーディングによる分析の結果、ミウさんにおける自己効力感の形成には、「遂行行動の達成」や「言語的説得」に加え、「言語学習者としての正統的な参加」が承認されることが重要であることがわかった。さらに、ミウさんの「現地語を使用し、状況全体を理解して対等な関係で交流したい」というビリーフが、自己効力感の形成を決定づけていることも明らかとなった。

Abstract

This study conducted a semi-structured interview with Miu, a multilingual learner in the Japanese context, to analyze: 1) Why she did not feel like a member of the target language community despite succeeding in advanced social practices using English? 2) Why she gained self-efficacy through simpler interactions, such as ordering at Starbucks, when using local languages? 3) How her beliefs about foreign language communication influence the formation of her self-efficacy? The results of the open coding analysis revealed that for Miu, the acknowledgment of 'legitimate participation as a language learner' is crucial for the formation of self-efficacy, in addition to mastery experience and verbal persuasion. Furthermore, it was clarified that her belief in 'using the local language, understanding the overall situation, and interacting on

an equal footing' determines her self-efficacy formation.

キーワード：ビリーフ、自己効力感、状況に埋め込まれた学習、多言語学習者、事例研究

Keywords : Beliefs, Self-Efficacy, Legitimate Peripheral Participation, Multilingual Learner, Case Study

1. 研究背景

外国語学習における自己効力感 (Self-Efficacy) は、学習者の動機づけを構成する重要な概念である。自己効力感は、Bandura (1977) によって「ある状況で自分はある行動を遂行できるだろうという認知」として定義され、その主要な形成要因として「遂行行動の達成」(Ueki & Takeuchi, 2017) や「言語的説得」(奥山, 2017) などが挙げられている。

一方で、近年第二言語 (L2) 学習が単なる言語能力の獲得に留まらず、新たな社会的・文化的行動の採用やアイデンティティの発展を伴うという、社会的側面の重要性が認識されている (Block, 2007)。

しかし、従来の枠組みだけでは説明が困難な現象が存在する。本研究の研究対象である多言語学習者のミウさん (仮名、女性) は異なる言語 (例：英語とスペイン語) を使用した際に、得られる達成感や自己効力感の程度に大きな差異が生じた。例えば外国滞在の経験において、米国留学中 (半年間) 全ての履修科目において最高評価を獲得し、高度な社会実践 (現地小学校へのイマージョン教育の取材) に成功したにもかかわらず、自己効力感や英語社会で英語を話す一員としての実感を得られなかった。一方で、旅行先のスペインでスペイン語を使用して比較的簡単なタスク (例えばスターバックスでの注文) を遂行した際に、大きな自己効力感を得ることができた。そこで本研究は、ミウさんの言語使用経験を詳細に分析し、この自己効力感の形成 (または減衰) にどのような要因が関わっているかを明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

2.1 自己効力感理論とその形成要因

外国語学習研究における自己効力感は、学習の継続性や学習行動に大きな影響を及ぼすことが知られている。Bandura (1977) は、自己効力感を形成する主な要因として、以下の4つの要素を挙げている。a. 遂行行動の達成 (実際に課題を成功させた経験。最も強力な形成要因とされる)、b. 代理的経験 (他者の成功を観察すること)、c. 言語的説得 (他者からの励ましや、能力に対する称賛などの肯定的なフィードバックを受けることで自信や有能感を得ること)、d. 情動的喚起 (自身の情動や生理的状態を認知すること) の4つである。

しかし、Bandura (1977) によって自己効力感の最も強力な形成要因として提示された「遂行行動の達成」では、1. 研究背景で述べたミウさんの二つの経験が示す、遂行行動の難易度と自己効力感の獲得が連動しない現象を十分に説明することができない。

2.2 日本における自己効力感の研究と本研究の位置付け

日本における外国語学習者の自己効力感に関する先行研究では、成功体験と社会的な側面の重要性が示されてきた。

まず、自己効力感の形成における具体的な成功体験の役割を検証した研究として、Ueki & Takeuchi (2017) が挙げられる。同研究は、留学経験が日本人大学生の理想自己にどのような影響を与えたかについて調査した結果、英語での成功体験が自己効力感をもたらし、L2 義務自己が理想自己へと変化していったと報告している。これは、成功体験が自己効力感の形成と L2 自己像のポジティブな変化を促すことを示している。

次に、成功体験の背後にある社会的文脈の重要性を奥山 (2017) は考察している。同研究は長期留学が自己効力感を高めることを示し、その背景には目標言語を話す社会への参加経験、そして他者からの評価の必要性 (言語的説得) があることを指摘している。

しかしこれらの先行研究は、他者からの承認や目標言語社会への参加が自己効力感の形成に重要な役割を果たすことを示唆しているものの、いつ・どの場面で「自分は目標言語を話す社会に参加できている」と感じるのかは十分に解明していない。「自分はそう感じる」という判断基準は学習者内面のビリーフ、特に言語学習やコミュニケーションに対する価値観と深く関連していると思われる。

このビリーフの側面にアプローチした重要な研究として、八島 (2001) がある。八島 (2001) は、日本の外国語としての英語の学習環境において、英語の学習意欲と L2 習熟度を予測する重要な情意変数として「国際的志向性」を提唱し、この志向性が自己効力感と連動して学習行動に影響を与えることを定量的に示した。しかし八島 (2001) は、本研究が着目する「遂行行動の達成にもかかわらず自己効力感が減衰する現象」の背後にあるビリーフについては、詳細に踏み込んでいない。

以上の先行研究は、①英語での成功体験や留学経験、②目標言語社会への参加経験や他者からの評価、③国際的志向性や目標言語文化への態度といったビリーフが、自己効力感と学習行動に深く関わることを示している。

本研究はこれらの知見、特に自己効力感の形成における社会的側面やビリーフの重要性を踏まえ、自己効力感の概念を拡張する。本研究では、自己効力感を「特定の言語使用場面において、自分が目標言語共同体の一員として参加し、意味あるコミュニケーションを遂行できると感じる度合い」も含むものとして捉える。すなわち、自己効力感を単なる自身の言語能力への評価にとどまらず、目標言語社会に参加している感覚 (目標言語社会における自己認識の確立) や、目標言語社会に承認してもらっている感覚 (社会的欲求の充足) を含む概念として位置づける。そして、上述した先行研究がまだ明らかにしていない「ビリーフ」と「自己効力感」の社会的な側面の関係を多角的に拡張することを目指す。

2.3 先行研究 (秋山, 2025) との関連性と本研究の目的

本研究は、秋山 (2025) によるミウさんの事例研究を継続しつつ、焦点を「多言語自己像」から「自己効力感の形成過程」へと移すものである。

先行研究秋山 (2025) では、「多言語理想自己 (Ideal Multilingual Self)」の内的な自己像の構築と認知過程を深く解明することを目的とした。多言語を使用する自己像の変化に関するミウさんの語りを対象にして、彼女が自分の持つ複数の言語レパートリーをどのように使用・管理しているのかをオー

ブンコーディングで分析した結果、【多言語使用における内的世界の構築】と【多言語リソースの管理と使用】という二つの大カテゴリーが得られ、主に以下の知見が明らかになった。

- a. 多言語自己の融合と多言語学習の動機づけ：ミウさんは独り言という独自の言語活動を通じて、言語間に境界線を設けず、自身のすべての言語レパートリーのリソースを自由に使う融合的な多言語自己を構築している。特に独り言の場面では、言語形式の「縛りなく」自由に表現できる「もう一人の自分」の存在を感じ、それが言語学習の動機づけに寄与していることが確認された。
- b. メタ認知的なコントロール：ミウさんは自身の多言語リソースを意識的にモニタリングし、個人の好みや状況に基づいて言語を選択・管理するという、自己調整学習の特徴を顕著に示していた。

一方でこの研究では、分析結果として得られた第三の大カテゴリーである【目標言語使用における学習者・使用者意識】について、意図的に考察から外している。これは、ミウさんが「他者との関係性」によって変化する自己像や、それが学習行動や動機づけに与える社会的な側面に関する考察が、内的な認知過程とは異なる独立した重要な研究テーマであると判断したためである。

本研究は、この秋山（2025）の「他者との関係性」によって変化する多言語自己像を掘り下げ、自己効力感の形成というより社会的な側面に焦点をあてている。具体的には、ミウさんの言語使用経験を詳細に分析し、2.2 で詳述した先行研究が示唆した「ビリーフ」と「自己効力感」の関係を、ミウさんの事例において彼女が思う「あるべきコミュニケーション」という理想から質的に解明し、それが自己効力感の形成にどのような役割を果たすことができるのかを明らかにすることを目的としている。

この目的のため、研究設問を以下のように設定する。1) 米国で高度な実践に成功しても、英語を話す社会の「一員」となる実感を得なかったのはなぜなのか。2) スペインでのより簡単な交流を通じて、自分でもスペイン語を話す社会の「一員」となることが可能であるという自己効力感を得たのはなぜなのか。3) ミウさんの外国語によるコミュニケーションに対するビリーフは彼女の自己効力感の形成にどのように影響を与えるのか。

ミウさんは英語、中国語、スペイン語、韓国語を継続的に学習し、外国語学習に対する強い動機づけを持つ多言語学習者である。本研究は日本のような外国語環境下で学ぶ学習者が自己効力感を獲得するための支援方略を検討する上でも有益な示唆になると考えられる。また、学習者が目標言語社会からどのような承認を求め、それによって自己効力感を感じるかは個々の学習者によって異なる可能性がある。学習者の背景が多様化する中、教育実践においてはこうした個別性への配慮が不可欠である。

3. 研究デザイン

3.1 調査協力者とデータ収集方法

本研究は、先行研究秋山（2025）と同一の調査協力者であるミウさんを対象とする継続的な事例研究である。ミウさんは、大阪府に所在する4年制大学に在籍する日本人女子大学生（調査当時）であり、外国語として英語、中国語、スペイン語、韓国語（学習順、英語以外は大学入学後に学習を始めた）を学習している。各言語の習熟度（CEFR との対照）は秋山（2025）で報告された通り（表1 参照）、中国語は最高位の C2、英語は B2、スペイン語は A2、韓国語は学習を開始した段階である。

表1 ミウさんの各種能力試験の成績（インタビュー実施時）

語種	試験とスコア	CEFR との対照
英語	TOEIC 935 点	B2
	英検準 1 級	B2
	IELTS 6.0	B2
中国語	HSK 6 級	C2
	中検 2 級	B2 ～ C1
スペイン語	DELE A2	A2
韓国語	ハングル検定 3 級	不明

ミウさんを本研究の研究対象として選定した理由は、以下の 2 点にある。

- a. 外国語学習そのものへの高い動機づけ：ミウさんは、英語・中国語・スペイン語・韓国語など複数の言語を次々と学習してきたが、その背景には「新しい言語を学ぶこと」自体を楽しみと感じる強い内発的動機づけがある。インタビュー全体を通して、ミウさんはそれぞれの言語を習得する目的については語ることがなかった。それよりも新しい言語を学ぶこと自体に喜びを感じている様子が伺われた。
- b. 高い内発的動機づけと既存の枠組みでは説明が困難な経験：ミウさんは複数の外国語学習において強い内発的動機づけを維持している学習者である。本研究では、この強い動機づけを支える自己効力感の形成メカニズムを解明することを目的とした。また、ミウさんの経験には従来の L2 学習動機づけ研究の枠組みでは説明が困難な現象が存在する（1. 研究背景参照）。この現象を解明することが、強い内発的動機づけを持ち、かつ学習に成功している学習者の内面を理解する手掛かりになると考えた。

データの収集方法は先行研究（秋山, 2025）と同様に、半構造化インタビューを採用した。ミウさんには合計 10 回のインタビューに協力してもらったが、本稿では 2024 年 3 月 9 日（第 8 回目）に実施された約 2 時間のインタビューのすべての内容を分析対象とする。秋山(2025)で分析対象となった第 6 回目（2023 年 12 月 14 日）および第 7 回目（2023 年 12 月 21 日）のインタビューでは、ミウさんの「多言語使用における内的な理想自己像」について主に語った一方で、どのような社会／場面で目標言語を使用するかによって達成感が異なることについても言及していた。この自己効力感と社会との関わりについてさらに掘り下げるために、第 8 回目ではこれについて詳しく聞くことにした。なお、第 8 回目のインタビューは、ミウさんが海外旅行（スペイン・フランス、時間順）を終えた直後に実施されたため、現地での言語使用に伴う自己効力感の経験が語りの中心となっている。インタビューで主に扱った質問の内容は表 2 の通りである。

表2 インタビューの主な質問項目

トピック	質問項目	話題の広げ方
1. 母語以外の言語によるコミュニケーションにおける言語学習方略とそのビリーフ	a. 外国語を学習する前と比べ、周囲で話されている会話の「聞こえ方」はどのように変化したか。 b. 外国語（特に中国語）が聞こえてきた際に、何を話しているのかが自然と気になり耳が向くようになるまでの「習慣」はどのように形成されたか	例：学習初期には「中国語が話されていると認識できる」だけで喜びを感じていたのが、次第に「会話全体がなんとなく理解できる」に移り、さらに「知らない単語が拾える」ように変化した過程を具体的なエピソードを交えながら詳しく聞き出す。 例：上記のように日常的に周囲の（母語以外の言語で話されている）会話にアンテナを張る習慣が、海外旅行などで現地語環境に入った時に、どのように活かされているか。現地の店員同士の会話や、周囲の客のやり取りを理解しようとする態度に、どのようにつながっているか。
2. 卒業旅行（スペイン・フランス）における言語使用と自己効力感	a. スペインでのスペイン語の使用経験 b. フランス滞在中、現地語がわからない状況で、コミュニケーションを図るためにどのような手段（例：英語、翻訳アプリなど）を使用したか。 c. これまでの旅行や留学経験で、現地語を使用した経験（例：スペイン語、中国語）と、今回フランスで英語や翻訳アプリを使用した経験を比較して、自己効力感の程度にどのような差異を感じたか	例：スペインのスターバックスで現地の人と同じように注文できた経験が、なぜ特別な喜びや自信（自己効力感）につながったのか。 例：フランスのパン屋で、店員同士や地元客の会話の内容が理解できないことが、なぜ大きなフラストレーションを起こしていたのか。 例：翻訳アプリやグローバル言語である英語を使用するのではなく、その国の言葉を使用することはミウさんにとってどのような意味合いがあるのか。
3. 英語、スペイン語と中国語の使用における自己効力感の差異の比較	a. 英語を使用した体験と、スペイン語を使用した体験を比較して、自己効力感や達成感にどのような違いが生じたか。 b. 英語を使用した体験と、中国語を使用した体験を比較して、自己効力感や学習成果への自信の感じ方にどのような差異が生じたか。	例：スペインで現地の人によるスペイン語の能力に対する称賛がミウさんに何をもたらしたのか。 例：米国留学では優秀な成績を収めたり、独力で小学校の訪問を実現したのにもかかわらず、自己効力感を得なかったのはなぜなのか。 例：中国語母語話者と間違えられた際に、なぜ強い喜びと「中国語を話す共同体の一員」という感覚が得られるのか。

3.2 データの分析方法とその手順

本研究は、先行研究秋山（2025）と同様にオープンコーディング（Open Coding）によってインタビューデータを分析した。データに内在する潜在的な意味を明らかにするため、具体的な発話内容から抽象的な概念へと帰納的に分析を進めた。具体的な分析手順は以下の通りである。

- a. インタビューデータを、一つのテーマや感情（例えば：「居心地が悪いと感じた理由」や「名前を正しく呼ばれた喜び」）を表す「意味のあるまとまり」として分割した。次に、各まとまりの内容を要約し、インタビューデータを参照しなくても理解できるよう、適宜言葉を補足した「概念」として再構成した。
- b. a で得られた「概念」を類似性でグルーピングし、それぞれに見出しをつけて「小カテゴリー」を形成した。
- c. 類似性のある小カテゴリーをさらに統合し、ビリーフや自己効力感といった理論的概念を用いて見出しをつけ、より抽象度の高い中カテゴリーを構成した。
- d. さらに同様の作業を繰り返し「大カテゴリー」を構築した。

上記のように分析を行った結果、本稿で分析対象となったインタビューデータは 136 個の「概念」

を得ることができ、そこから 32 個の「小カテゴリー」を得た。さらにその「小カテゴリー」から 6 個の「中カテゴリー」を、最終的には 2 つの「大カテゴリー」を得ることができた。質的分析の過程を明確にするために、以下にオープンコーディングによる分析例を表 3 に示す。

表3 オープンコーディングによる分析例
(小カテゴリー←概念←インタビューデータ)

小カテゴリー	概念	インタビューデータ
小カテゴリー：翻訳機を頼って逐一調べることで、その地域の「内部」に入り込めず、常に外部の「第三者」として存在する感覚がストレスとなる。	現地の言葉がわからず翻訳アプリを使ってその場で逐一調べて、自分の母語に毎回翻訳する行為は、面倒であるだけでなく、自分がその地域の「外側」にいるような感覚を強めてしまう。	“每次每次把手机拿出来，开” Google 翻訳して、これは何なのかっていう調べる作業自体も“麻烦”、そういう行動自体も面倒くさいと思いますし、それをしてる時点、言語を調べたり、自分のわかる言語に直したりそういうのをするのが 100% その地域の外から見てる感じするんですよね。
	現地語がわからないことで、自分がその場の「内部」に入っておらず、常に外部の第三者として存在しているように感じ、そのことがストレスになっていた。	自分は第三者ですごく外から見てる感じがする。なんかちょっとストレスだったんです。
	フランス語がわからないため、フランスでは常に外部の第三者として存在しているように感じた。そうならないために現地語を学んでから訪れたほうが良いと考えた。	それがフランスで。フランス語勉強してから来ようと思いました。

4. 結果

4.1 分析結果

本研究では、ミウさんの多言語使用の経験を深く掘り下げ、特に米国、スペイン、フランスでの経験における「目標言語社会における目標言語を使用する一員」となる実感や自己効力感の獲得、そしてミウさんが考える「外国語の使用に対するビリーフ」との関連性について考察した。その結果、【言語使用ビリーフによる動機づけの差異】、【社会的実践を通じた自己効力感の形成】という 2 つの大カテゴリーが得られた。具体的には、ミウさんの自己効力感が向上するには、単なるコミュニケーションの成功や高度なタスクの達成だけでは必ずしも十分ではなく、目標言語を話す社会の成員からの肯定的評価や承認という社会的側面が強く関係していることが明らかになった。そして、この自己効力感の形成は「外国語を使ったコミュニケーションとはこうあるべき」という彼女のビリーフと深く関わっていることもわかった。

以下、オープンコーディングによる分析結果を表 4 に示し、次の節ではミウさんの語りを引用しながら詳述する（語りの引用はゴシック体で示す）。

表4 ミウさんの語りから得られた大中小のカテゴリー

大 カテゴリー	中 カテゴリー	小 カテゴリー
言語使用 ブリーフによる 動機づけの差 異	周囲で行われ ているコミュニ ケーション への周皮的参 加の習慣化	外国語学習により周囲の音声への認識が変化し、それに伴い状況把握への意識および能動的聞き取り習慣が形成される。
		個別の言語（中国語）の聞き取り能力の発展に伴う意識的学習から無意識の習慣へと移行し、内発的な内容理解欲求により学習モチベーションが維持される
		母語である日本語に対する学習的関心が欠如し、学習中の外国語（中国語）には自然と注意を向けるという、言語に対する学習的価値判断に基づく選択的な関心の向け方に差異が生じる。
		全体的な理解から個々の単語・表現の識別へ移行し、未知の表現に遭遇した際にはその場で積極的に調査し、周囲の状況や行動と照らし合わせることで能動的に言語（中国語）を学習する過程
		中国語学習の初期段階から進んでいく中で、聞く能力の向上が自信へとつながった。
		外国語学習により周囲の音声への認識が変化し、それに伴い状況把握への意識および能動的聞き取り習慣が形成される。
	単なる行動の 模倣を超えた その場の状況 への全体的参 加に対する希 求	外国語学習が旅行や現地での体験機会を増やし、その中で言語を観察・実践することから得られる具体的な学習的メリットや喜び
		日常的なやり取りにおける現地住民の行動・言語パターンを詳細に模倣・体得し、自己のコミュニケーションを適応させる。
		単なる商品取引などの最小限なコミュニケーションだけでなく、その場の背景にあるより豊かな会話や状況全体を理解したいという強い欲求がある
		現地のコミュニティに参加できたことを実感する、他者との行動・言語の一致を通じた喜び
	学習の起点に おける義務と 選択の違いが もたらす内発 的な動機づけ の差異	自主的に選択した言語と義務教育で学ばないといけない言語の学習動機と情熱に質的差異が存在する。
社会的実践を 通じた自己効 力感の形成	現地語の使用 による対等性 の獲得と「目 標言語を使用 する共同体の 一員」として 承認されてい る感覚がもた らす自己効力 感	旅行において他者とは異なる「言語活動」を重視する価値観を持ち、英語でやりとりする友人との体験と自分の現地語の使用体験を比較することで、両者の間に明確な違いを感じ取る
		現地語を使用することにより達成感が高まり、情報獲得の効果が最大化される。
		現地語を使用することで、英語でのコミュニケーションとは異なる、より対等な関係での交流が実現し、それが大きな達成感や喜びにつながる。
		現地語を使用することにより、「観光客」から「目標言語を話すコミュニティの内部者」へと位置づけが変化し、誇らしさが実現される。
	名前の受容が 決定する共同 体への正統的 な参加の成否	名前が正しく呼ばれることによる存在の承認と、その国で生きていけるという確信が生まれる。
		米国で名前を使わず英語名を名乗ることによる自己喪失がストレスになる。

大 カテゴリー	中 カテゴリー	小 カテゴリー
社会的実践を通じた自己効力感の形成	他者からの承認による正統的周辺参加の促進と自己効力感の強化	現地の人からのスペイン語能力への称賛が、スペイン語を話すコミュニティに受け入れられた喜びやそのコミュニティの一員である感覚につながる。
		英語使用では称賛獲得が困難で特別な達成感や感動を得にくい。
		中国出身ではないにもかかわらず中国人と間違えられるほど学習の努力が認められ、学習成果への自信につながる。
		中国人に間違えられることや称賛されたことが嬉しく、また「ネイティブみたい」という褒め言葉は学習者にとって非常に大きな意味を持つ。
		学習者としての中国語能力が褒められても満足できない。
		中国人に間違えられたことにより中国語を話すコミュニティの一員という感覚と対等性が実感される。
		会話の必要性や状況に応じ、日本人であることを明かす場合と、あえて訂正せず誤解のままにする場合がある。
		学習する言語の習熟度により、達成感を獲得する基準と期待値に差異が生じる。
	言語的障壁による正統的周辺参加の阻害と自己効力感の減衰	フランスで英語による最小限の会話しかできないことへのフラストレーションと、現地語によるより豊かな交流への切望が生じる。
		翻訳機を頼って逐一調べることで、その地域の「内部」に入り込めず、常に外部の「第三者」として存在する感覚がストレスとなる。
		フランスではフランス語がわからないことで周囲の状況への理解が困難である。それにより居心地の悪さやストレスを感じ、現地語でのコミュニケーションが旅行の充実度と密接に関わると認識した。

4.2 目標言語社会の成員からの評価がミウさんの自己効力感の形成に与える影響

研究設問1)で言及した現象（米国では自己効力感を得られなかったこと）に対し、一般的に「高い言語運用能力を持つ学習者は、成功体験を通じた達成感を得にくい」という解釈が考えられる。ミウさん自身も英語はグローバル言語であるため、多様な背景を持つ話者が存在することから、「英語が上手」と称賛される機会が少なく、達成感を得にくいと認識している。これについてミウさんは以下のように語っている。「英語上手やねって褒めないじゃないですか、外国人（筆者注：ここでは米国人）って。グローバルの言語の一つやし、いろんなバックグラウンド持っている人おるから、アジア圏の見た目でも英語圏にずっと住んでたら、住んでて自分は米国人になってる人もおるし、そういう人もいる。だから、褒められて傷つく人もいないじゃないですか、英語上手やねという言葉に。」

しかし、この「習熟度が高くなるほど達成感を得にくい」という解釈は、ミウさんが同様に高い運用能力を持つ中国語における達成感を説明できない。

ミウさんは中国語においても高い習熟度を有しており、学習歴4年（留学はオンラインのみ）であるにもかかわらず、中国語母語話者に中国人であると間違えられるほどの能力を有している。ミウさんにとって、ネイティブであると間違えられることは学習者にとって大きな褒め言葉であり、この誤認に強い喜びを感じている。

しかしながら、ミウさんはこの誤認を自発的に訂正すると語っている。つまり、ミウさんはネイティブと間違えられること自体を称賛と感じているのに加え、その誤認を訂正することによって、相手か

ら得られる称賛の言葉を求めていると解釈できる。「中国に住んでいたたり、親戚に中国語母語話者がいたりするわけではないのに褒められている（筆者注：ネイティブと間違えられる）自分を認めてほしい」という語りからそのことがわかる。

したがって、ミウさんの中国語使用における自己効力感は、単にタスクを成功させることだけでなく、目標言語を話す社会の成員に外国語環境下で学ぶ学習者としての努力と背景を理解された上で、その成果を正統に評価してもらうという二重の承認構造が機能していることで成立していると解釈できる。

この学習者としての努力の承認が、英語使用時、特に米国では得られなかった。英語がグローバル言語であるという認識を持つミウさんは、多数の移民が多様な英語を話す米国の社会では、彼女の英語を外国語として学んだ学習者としての背景やその努力は評価の対象となり得ないので、自身の英語の能力が評価されないと解釈した。その結果として、ミウさんは「英語を話す社会の一員として認められた」という実感を伴う自己効力感を得ることができなかったと考えられる。

Bandura (1977) の自己効力感理論における「言語的説得」は、他者からの励ましや能力に対する肯定的フィードバックが自己効力感を高めるというメカニズムを想定している。また、奥山 (2017) も留学経験における自己効力感の形成を、主に成功体験や他者からの承認という従来の枠組みで捉えている。本研究は先行研究では捉えきれなかった、「他者からの単純な能力承認」を超えた新たな概念を提示している。すなわち、効果的な言語的説得には、言語能力に対する評価だけでなく、外国語学習者としての努力への評価を含む「二重の承認構造」が必要であり、さらにミウさんが示した「ネイティブと間違えられることへの自発的な訂正」という行動は、学習者が真に求めているのが学習過程そのものへの正統な評価であることの可能性を明らかにしている。このことは、従来の自己効力感理論における言語的説得の概念を、学習者アイデンティティの承認を含む多層的な概念として拡張する必要性を示唆している。

ここで注目すべきは、この「二重の承認構造」の必要性が、外国語環境下にある日本人外国語学習者特有の学習文脈から生じている可能性があることである。Norton (2000) では、移民など不安定な立場にある学習者が、目標言語の習得を通じて社会的・経済的資本を獲得しようとする動機づけを説明している。これに対し、本研究のミウさんは移民ではなく、生存や経済的必要性とは切り離された形で学習している。このような条件下では、外国語の学習は国際社会への関心（八島, 2001）、あるいは自己変容の実現（秋山, 2023）といったより多層的な動機づけに基づいている可能性がある。しかし、Norton (2000) で想定している社会と、ミウさんがイメージしている社会とは異なるかもしれないが、どちらも周囲との関係性が動機づけに重要な位置を占めていることは共通している。この違いは、ある言語を使う社会がホスト社会となり、多様な背景を持つその言語の学習者を受け入れる際に、その学習者それぞれの文脈に応じた承認のあり方を模索する必要性を示唆している。

また、米国滞在中にミウさんは自分の名前が米国人に伝わらないことが多く（英語にない母音連続を持つミウさんの本名は英語話者には難しいようである）、やむを得ず英語名を使用した。この経験は、自分自身が「違う人になりきらないといけない」と感じさせ、「自分ではなくなる」という強いストレスを伴っていたことが語られている。自分の存在が認められない、または本来の自分とは異なる形で扱われるという感覚は、現地社会に属する「一員」であるという感覚の獲得を阻害したと考えられる。

これらの要因が複合的に作用し、ミウさんは米国で英語を用いた高度な実践に成功したにもかかわらず、英語を話す社会の「一員」となる実感を得られなかったと考えられる。

これまでに見てきたように、ミウさんが自己効力感を得るためには、目標言語共同体の一員であると感じたいという欲求と、学習者としての背景や努力を正当に評価されたいという欲求が関係しているように思われる。

このような「複数の異なる種類の欲求」については、これを階層化したマズローの欲求段階説 (Maslow, 1943) がある。これは、欲求には (低次の欲求から高次へと列挙すると) 生理的欲求、安全の欲求、所属と愛の欲求、承認の欲求、自己実現の欲求という階層構造があり、低次の欲求が満たされないと、より高次の欲求が動機づけられないとする仮説である。

このマズローの欲求段階説には、文化によって優先順位に違いがあるという指摘や、段階的ではなく複数の欲求が同時に起こる場合もあるといった批判 (Fallatah & Syed, 2018) もある。ミウさんの例に関しては、マズローの仮説の中の「所属と愛の欲求」と「承認の欲求」に似てはいるものの、この研究ではこの仮説をそのまま当てはめて検討することはしない。ミウさんの場合も上述のような2種類の欲求があり、それがどちらも自己効力感に関わるということは明らかである。しかし、「学習者としての背景や努力を認められたい」という欲求と「その社会の一員であることを実感したい」という欲求とが階層関係にあるのか、あるいは、どちらかが欠けても自己効力感が得られないというような依存関係にあるのか、現時点では不明であるからである。

4.3 その場の状況への「全体的な」参加がミウさんの自己効力感の形成に与える影響

米国での経験と対照的に、ミウさんはスペインでの比較的簡単な交流を通して、スペイン語を話す社会の「一員」となることが可能であるという強い自己効力感を得た。この自己効力感の獲得には、以下の要因が大きく寄与している。

第一に、他者からの承認である。スペイン語を話すアジア人であるミウさんに対し、現地の人々が驚き、称賛してくれたことが大きな喜びにつながった。さらに、スペインではミウさんの日本名が正確に発音してもらえた。この喜びは自分の存在がスペイン社会に認められた感覚につながり、この国で生きていけるという強い確信まで抱かせた。この経験は米国滞在時において、自身の名前が正確に伝わらず英語名の使用を強いられた経験と際立って対照的であり、目標言語共同体における正統な成員としての名前の承認がミウさんにおける自己効力感の形成に極めて重要であることを示唆している。

第二に、現地語を使用することによる達成感と対等な関係性である。ミウさんは現地語 (スペイン語) でやり取りすることで、英語でのコミュニケーションとは異なる、より対等な関係での交流が実現したと感じている。現地 (スペイン) で英語でやり取りする際、ミウさんは現地の人々が「コミュニケーションをリードしている」と感じており、「相手が歩み寄ってくれている」という感覚があったと述べている。同じ行動 (例えば飲食店での情報収集) をしたとしても、現地語で実行するか英語で行うかによって、達成感が大きく異なっていたとミウさんは語っている。

第三に、スペイン滞在中、ミウさんは「観光客」ではなく「スペイン語を話すスペイン社会の一員」として扱われたような喜びと誇らしさを感じた。例えば、スターバックスで前の客と同じようにスペイン語で注文できた経験が、同じスペイン語を話す共同体の一員として行動できた喜びにつながった。

さらに、この経験においてミウさんの自己効力感は、注文という遂行行動の達成のみに起因するのではなく、店員同士のスペイン語による会話内容を理解できること（自分がその会話に積極的に参加せずとも）によって、その場の状況全体への参加が実現したという実感につながった。

この現象は、ミウさんが抱く「単なる行動の模倣を超えたその場の状況への全体的参加に対する希求」が満たされた結果であり、この周辺的な参加を通じた状況に対する理解こそがミウさんの自己効力感の向上につながったと解釈できる。

4.4 ミウさんが考える「あるべきコミュニケーション」の姿が自己効力感に与える影響

ミウさんにおける自己効力感の形成には、彼女が外国語を使用する際に抱く「あるべきコミュニケーション」のビリーフが深く関わっている。このビリーフは、単なる情報の伝達を目的とするものではなく、その場の全体的な状況への理解、及び目標言語を話す社会の一員としての社会的承認を重視する。

まず、ミウさんは周囲の状況全体を理解したいという強い欲求がある。彼女は、外国語を学ぶことで、以前は雑音だった周囲の音声が「意味ある言葉として入り込んでくる」ようになり、周りで何が起きているかを無意識にでも気にするようになった。この「状況への全体的参加」というビリーフこそが、フランスでの強いストレスを引き起こした。

フランス語がわからない状況において、ミウさんはパン屋での店員同士のより豊かな会話が気になったり、周囲の状況が理解できないことへのストレスを強く感じていた。注目すべきは、この状況でミウさんが示した言語選択に対する独特な認識である。英語や翻訳機を使用してフランス人とのコミュニケーションを図ることは可能であったにもかかわらず、ミウさんにとってこれらの手段は「同じこと」だったのである。

なぜなら、英語を使用しても翻訳機を使用しても、結局、ミウさんが強く希求する「その場の背景にあるより豊かな会話や状況全体への参加」は実現されないからである。英語でのやり取りは最小限な会話でとどまっている感覚をもたらし、現地語でやり取りした際の達成感とは全く異なる。また、翻訳機に頼る行為はその地域の「外側」にいる感覚を強め、常に外部の「第三者」として存在しているストレスをもたらす。つまり、ミウさんにとってコミュニケーションの成功とは、単に意思疎通が図れることではなく、現地語を通じて対等な関係性を実現し、その場の状況に完全に溶け込むことである。

この背景には、ミウさんが持つ独自の外国語学習方略が深く関わっている。彼女の学習法は、周囲の言語環境への意識を非常に高めるものである。例えば、中国語学習において、ミウさんはまずその場で交わされている会話全体を聞き取り、「何について話しているのか」を大まかに把握する。その上で、徐々にネイティブが使っている表現や言葉を拾い、周囲の行動と照らし合わせながら能動的に言語を理解しようと実践するという過程を踏んでいる。この習慣化された「能動的な聞き取り習慣」こそが、フランスにおいて、状況把握ができない状態を「ストレス」と認識させる原因となり、「英語も翻訳機も同じ」という認識を生み出している。

ここで興味深いのは、ミウさんにとって、フランス語の学習経験がないことは自己効力感の減衰の言い訳になっていない（「フランス語を勉強したことがないから、その場に参加できないのは当然」のように考えていない）と思われることである。外国語を使ったコミュニケーションというものに

対する彼女のビリーフの特徴がここからもうかがわれる。

さらに、「第三者」ではなく「目標言語を話す社会の一員」として社会参加をしたいという欲求がある。ミウさんにとって、英語や翻訳機の使用は最小限なコミュニケーションは可能にするものの、真の意味での「共同体への参加」や「存在の承認」からは程遠い手段でしかなかった。彼女の思う「あるべきコミュニケーション」は、観光客であることは変わらないのだが、「その国の人と同じように行動」することを通じて、現地社会の一員に近づくことを目指しており、スペインでの経験（スターバックスで前の人と同じように注文できたことなど）はその達成感を伴い、自己効力感の向上につながっている。

この「共同体の内側にいる一員」として参加を希求し、その承認を得ようとするミウさんのビリーフは、Lave & Wenger (1991) が提唱する「正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation)」の理論的枠組みで捉えるとより明確に理解できる。正統的周辺参加とは、学習者が特定の実践共同体において、最初は周辺の立場から参加し、徐々に中心的な参加者へと移行していく過程を指す概念である。ミウさんの場合、フランスでは言語的障壁により「周辺の参加」すらできず共同体から排除された感覚を抱き、一方スペインでは現地の人と同じ行動を取ることで「周辺の参加」の最初の一步を実現し、共同体の一員になれる資格があるという承認を感じ取ったと解釈できる。

このようにミウさんの自己効力感の獲得は、単なる遂行行動の達成に留まらず、目標言語共同体からの「正統的な参加者の資格がある者」としての位置づけを自らが認識するか否かと深く関わっている。そしてミウさんが自らをそうと認識できるかどうかは、彼女が思う「あるべきコミュニケーション」の理想と強く関係している。この理想とは、単に言語を介して情報をやり取りするだけでなく、周囲の状況全体を深く理解し、その言語共同体の「内側」にいる一員として対等な関係で参加することであると結論付けられる。

5. 考察

本研究の分析結果は、Bandura (1977) が自己効力感の最も強力な形成要因とする「遂行行動の達成」や「言語的説得」が、ミウさんにとって常に「目標言語を話す社会の一員となる実感」に結びつくわけではないことを示した。ミウさんの内面に抱く「外国語でのコミュニケーションに対するビリーフ」は、ミウさんが目標言語共同体への参加をどのように解釈し、最終的に自らを「正統的な参加者」として認識するかを決定づける上で極めて重要な役割を果たしていることもわかった。

本章では、ミウさんの「外国語でのコミュニケーションに対するビリーフ」が自己効力感の形成に与える影響を詳細に分析するため、Hymes (1972) が提唱した SPEAKING モデルを分析の枠組みとして援用する。このモデルは、コミュニケーションの社会的な文脈を捉えるための以下の 8 つの要素から構成されている (表 5)。

表5 SPEAKINGモデルにおける8つの構成要素

S (Setting/Scene : 場面と状況)	コミュニケーションが行われる物理的な場所、心理的な雰囲気や文化的背景。
P (Participants : 参加者と関係性)	話者と聞き手を含む、コミュニケーションに関わるすべての人々。
E (Ends : 行為の目的/結果)	コミュニケーションの目標、意図、および期待される結果。
A (Act Sequence : 行為の連鎖)	コミュニケーションイベントの順序と構造、個々の発話行為の構成。
K (Key : 態度)	コミュニケーションが行われるトーンや態度 (例 : 真剣、遊び心など)。
I (Instrumentalities : 手段/形式)	使用されるチャネル、形式、および言語コード (方言、レジスターなど)。
N (Norms : 社会的規範/慣習)	相互作用を支配する社会的規則と慣習。
G (Genre : ジャンル)	コミュニケーションイベントの文学的・文体的タイプ (例 : 会話、講演など)

以下、ミウさんが経験した具体的なコミュニケーション場面（抜粋）を SPEAKING モデルの各要素に照らして比較する（表6）。これにより、彼女独自のビリーフがどのように機能し、自己効力感の形成（または減衰）につなげるのかを明確にする。なお、本研究はミウさんの社会的・心理的な参加過程に焦点を当てていることから、A (Act Sequence) 及び G (Genre) はミウさんのビリーフや自己効力感の差異を説明する決定的な要素ではないと判断したため、分析の対象から除外する。

表6 SPEAKINGモデルによるミウさんの経験の比較（抜粋）

SPEAKING 要素	スペインの喫茶店	米国の小学校訪問	フランスのパン屋	フランスのお菓子屋
S (Setting/Scene) 場面と状況	スペインのスターバックス (店内、レジ周り)	現地の小学校でイマージョン教育の訪問。	パリのパン屋。突然の雨で屋根が半分外の列に並ぶ。	パリのお菓子屋 (店内)
P (Participants) 参加者と関係性	店員 (バリスタ) と本人 (客)	教師、現地学生	客としてパン屋の屋根に並ぶ見知らぬ現地のおばさんと本人。	店員と本人 (客)
E (Ends) 行為の目的/結果	注文の達成に加え、現地の慣習を体得し、対等な立場で交流を達成。情報も最大限に引き出せたと感じる。	高度な社会的実践に成功。しかし「英語を話す社会の一員」となる実感を得られなかった。	社会的ルール (感謝・謝罪) を適切に伝えられない。全体的な状況把握ができない。	購入達成だが、「周りの人はもっと何かを話している」ができない辛さ。
K (Key) 態度	達成感・うれしさ (現地のやり方にスムーズに乗れた)	達成感の低下/ストレス (違う人になりきれないといけない)	居心地の悪さ・無力感 (現地語が全くわからず辛い)。	居心地の悪さ

SPEAKING 要素	スペインの 喫茶店	米国の 小学校訪問	フランスの パン屋	フランスの お菓子屋
I (Instrumentalities) 手段 / 形式	口頭のスペイン語 (ローカル言語でのやりとり)	英語。英語名の使用。	フランス語は未習得。 非言語的の手がかりや 最小限の英語で対応。	英語 / 翻訳アプリ。
ミウさんにおける N (Norms) 社会的規範 / 慣習	外国に行くのなら、 現地語を多少なりとも 習得し、それを使う べき。そうすれば 周りで何が起これ ているかがわかるし、 周りと同じような行 動ができる。そのほ うが楽しいし、文化 を体験するというの はそういうこと。	高度な実践を成功さ せた場合の学習者と しての努力が目標言 語社会の成員に評価 されることが、自己 効力感を形成する。 また、自分の本来の 名前を尊重されるこ とが、共同体の正統 な参加者として受け 入れられるために不 可欠。	感謝や謝罪といった 最低限の社会的ルー ルを現地の言葉で適 切に伝えることは、 どの言語においても 遵守すべきことであ り、それができない 状態(状況把握が困 難な状態)は、「外部 の第三者」として存 在するストレスを生 む。	ローカル言語を使 わない、翻訳機 などに頼るとい うのは、目標 言語社会を第三 者的に外から眺 めているという ことである。
以上の4つの場面で ミウさんが感じた 自己効力感	強化。この国で生き ていけるという強い 確信。	強化せず。英語を話 す社会の一員という 実感なし。	ストレス(外部の第 三者として)。	ストレス(外部 の第三者とし て)。

SPEAKING モデルによる分析の結果、ミウさんの自己効力感の形成は、コミュニケーションの構成要素 (S, P, E, K, I, N) との連関として構造化できる。すなわち、ミウさんの自己効力感は、目標言語共同体から「その社会の言語を習得しようとしている異邦人(言語学習者としての正統的周辺参加)」として承認されるか否か (N:Norms) に大きく依存していることが明らかになった。ミウさんの事例において、タスクが遂行されたとしても(例: 高度な社会実践に成功、フランスで英語による注文に成功)、言語学習者としての正統的周辺参加が承認されなかった場合、自己効力感は減衰する。

一方で、「現地語を使用することによる対等性の獲得」や「個人の名前が共同体の正統的な成員として認められる」といったミウさんの規範意識 (N) が満たされ、正統的な参加者としての承認が得られた場合、自己効力感は「この国で生きていける」という確信にまで強化される。

6. 本研究の限界と意義

本研究で明らかになったミウさんの「外国語でのコミュニケーションに対するビリーフ」や「そのビリーフがミウさんの自己効力感の形成に与える影響」は、ミウさんの固有の学習経験から得られたものである。これは他の学習者にも共通して見られるものなのか、あるいは学習者の背景や学習目標によってどのように変化するのかについては、本研究の範囲では明らかにしていない。これは今後の課題とする。

さらに、今回の分析は主として学習者の主観的な体験に基づいており、目標言語共同体側の視点や、実際のコミュニケーション場面における相互作用の客観的な分析は含まれていない。「承認」や「正統的な参加者としての認識」といった概念についても、学習者の内省的な報告に依拠しており、より多角的な視点からの検証が求められる。

以上のような限界はあるものの、本研究は外国語学習における自己効力感の形成過程が、学習者個

人のビリーフによって多様になりうることを示している。このことは外国語教育において、学習者一人ひとりが持つビリーフを理解し、それに配慮した指導や評価を行うことの重要性を示唆している。

さらに、第二言語として学んでいる場合であっても、外国語としてであっても、学習者が目標言語社会との関わりの中で「正統な参加者」として承認されているという感覚を抱くことは、自己効力感の形成において無視できない要素である。本研究は、このような目標言語社会との関わりを重視した言語教育、言語学習の方法について考えるきっかけを与えると考える。

引用文献

- 秋山美香 (2023) 「第2 外国語として中国語を学ぶ日本人学習者の自己変容：中国語を話す『わたし』の事例研究」『中国語教育』 21, 125-145.
- 秋山美香 (2025) 「多言語使用者の自己像と多言語学習の動機づけ：一人の成功した学習者の事例から」『外国語教育研究』 28, 152-172.
- 奥山和子 (2017) 「留学経験がもたらす効用としての自己効力感の形成過程：質的研究手法を使って」『大学教育研究』 21, 83-101.
- 八島智子 (2001) 「『国際的志向性』と英語学習モチベーション：異文化間コミュニケーションの観点から」『外国語教育研究』 創刊号, 33-47.
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84(2), 191-215.
- Block, D. (2007). *Second language identities*. London: Continuum.
- Fallatah, R. H. M., & Syed, J. (2018). A Critical Review of Maslow's Hierarchy of Needs. In R. H. M. Fallatah, & J. Syed (Eds.), *Employee Motivation in Saudi Arabia: An Investigation into the Higher Education Sector* (pp. 19-59). Palgrave Macmillan.
- Hymes, D. (1972). Models of the interaction of language and social life. In J. J. Gumperz & D. Hymes (Eds.), *Directions in sociolinguistics: The ethnography of communication* (pp. 35-71). Basil Blackwell.
- Lave, J., & Wenger, E. (1991). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. New York: Cambridge University Press.
- Maslow, A. H. (1943). A Theory of Human Motivation. *Psychological Review*, 50, 370-396.
- Norton, B. (2000). *Identity and language learning: Gender, ethnicity and educational change*. London: Longman/Pearson Education.
- Ueki, M., & Takeuchi, O. (2017). The impact of studying abroad experience on the affective changes related to L2 motivation: A qualitative study of the processes of change. In M. T. Apple, D. Da Silva, & T. Fellner (Eds.), *L2 selves and motivations in Asian contexts* (pp. 119-133). Multilingual Matters.